

菊^{きく}地^ち蘭^{らん}蔵^{そう}

— 未刊に終わった能登誌 —

成之坊松一

菊地家は明治以前まで友末と呼ばれている。当時は十村（とむら）役をつとめた村の一等長者で石高は百二十石、いまの野々江町杉ノ木部落海岸に近く広い屋敷を持っていたが明治の改姓で菊地と改めた。代々百姓のかたわら漁も行なった。蘭蔵は先代六左衛門の弟で幼児から頭脳明せき、記憶力の正確なことは驚くばかり。飯田の葛原宮司、蛸島の光行寺老僧に漢詩を習い、あとはほとんど独学。明治初年、青年を集めて四書、文書規範、十史略などを好んで教えたが、その文句などはほとんど記憶していたという。器用人で画や印刻のほか数学に明るく大きな数をつかむことに天分があり、当地方でのトンネルの測量の大半は彼の計算によったらしい。

日清戦争に出征中、彼は思うままに郷里へ詩を書いて送ったが、当時飯田へ来ていた木曾岐山（漢詩をよくした画家）に見せたところ、支那の大家の物したものだろうといひてきかなかつたという。いま残っている手の跡としては古君の浜中家の屏風（びようぶ）と藤波や宇出津の碑文あたりであろう。

ひとところ正院千光寺の侍僧となったこともあるが、生来世渡りがへたで、いつも貧乏暮しであった。主家没落後は塩田夫となって浜小屋に独居、風雨月光を友として、気に向けば詩を作り漢書に親しんだ。

学問にすぐれていたのも、たまたま村の先生に引っぱり出されたが免許状がないので身分は授業生。あるとき教員検定試験を受けたが見事落第した。作文試験に得意の漢詩を興に乗って書きまくったが、試験官はさっぱり読めないでおとされたらしい。あとで他の先生がその答案を発見し、これは大物だとうなつたが、あとの祭りである。

彼の最大の功績は能登誌を書き上げたことだが、上戸の藻寄鉄五郎氏が出版のため東京へ持って行き、震災で原稿をまるごと焼かれてしまった。晩年は新宅の家で酒屋番頭として働き一生無妻、年六十歳で終命した。

（元市立図書館長代理）